



2022年度 外部評価実施概要

■実施日時 2022年6月28日(火) 13:00-14:45

■評価専門部会委員

生和 秀敏氏(大学基準協会特別研究員、広島大学名誉教授)

吉武 博通氏(情報・システム研究機構監事、東京家政学院理事長)

渡会 修氏(行政管理研究センター理事長)

■本学出席者

村上理事長、中道院長、村田学長/副理事長、

小菅副学長、藤田事務局長、小野総合企画部長

■外部評価実施サイクル

1年目:内部質保証システム及びTotal Reviewの適切性

2年目:中期総合経営計画(KGC2039)の主要テーマの取組、
進捗状況及び成果等の適切性

3年目:総合的なマネジメントに向けた諸計画の連動性



2022年度外部評価対象の主要取組テーマ

- 1) KSC再編・活性化
- 2) 国際化
- 3) AI人材育成
- 4) 学修支援（ライティングセンター）
- 5) 学部教育改革（法、商、経済学部の取組）
- 6) 入試制度改革
- 7) IR（Institutional Research）推進



委員からの総評 I

☑大変熱心に取り組んでいて感心した。

その上で気になることが3点ある。

1) 今後の国際化の方向。キリスト教主義は国際化に有利だが、非キリスト教社会にどう向き合うかが今後の大きな課題だと思われる。

2) 国際プログラム、ハンズオンプログラムのように次元の異なる教育目標を掲げたものをダブルチャレンジさせるというのは非常に有効。一方で、他の専門分野の履修を促す副専攻制度の枠組みは学生のニーズも踏まえてもう一度整理することが必要ではないか。

3) Kwanseiコンピテンシーというのは、現在は学生の主観的な評価が中心。主観評価は悪いことではなく複数の主観は客観性を持ちうるものではあるが、より妥当な評価の仕組みを示すことができると良い。

☑関西私大の雄としての地位に安住せず、様々な試みにチャレンジしており、その姿勢は大いに評価できる。今後も、失敗を恐れず、アジャイル方式で積極果敢な取組を展開してほしい。



委員からの総評2

☑関学の優れているところは、伝統に加えて常に前を向いて変革していること。理事長・学長のリーダーシップの下での取組も興味深く、経緯を表したい。国立は疲弊している。これまでは学部教育は私立、大学院研究は国立が担っていると言われてきたが、これからは私立の果たす役割は大きくなっていく。学部教育は勿論、大学院教育、研究を今後どのように強化していくかということを是非考えて欲しい。大学院の更なる充実と大学院進学率の向上などを通じて、私立の研究大学としての地位をより強固なものにしていただきたい。そのことが教育力にもつながると期待している。

国際化やAI人材育成はいいことであるが、「関学における」国際化、AI人材とは何かについて、掘り下げて検討し施策に結び付けて欲しい。

計画もきちんとしているし、IR(データ)で管理するというのは徹底的にやるべきだが、最後にはやはり肌感覚、人間の生きざまと言った数値化できないもの、計画に表せないものが圧倒的に多い。そこを大事にするために計画やデータがある。そういった数値化はあくまでも手段であり、学生が頑張っている、育っているということを教職員が肌で感じることのできる大学であって欲しい。そのためには教職員がゆとりを持って学生と接することのできる環境を整える必要がある。今取り組んでいるDXなどによって教職員のゆとりが出れば、計画やデータがより意味のあるものとなる。



1) KSC再編・活性化(文理融合):指摘事項

・文理横断・分野横断の取組は評価できる。学生の自主性をいかに涵養するかが課題となろう。

・学部のミッションによって融合の形態も少しずつ変わっている。強制的に融合するのではなく、融合が必要になったときのための仕組みづくりが必要。学生に強制するのではなく、なぜそれが必要か、教員がきちんと説明できるようにしておく。教員自身が従来の伝統的なディシプリンの枠を超えているような分野について十分に理解できている、関心を持っている必要がある。アメリカ・バークレーの教員採用の基準の一つとして他の分野を自分の分野と関連付けて学生に説明する能力があるかどうかということがある。そういうことが今後重要であると考える。

・文系学生の理系分野履修のハードルは高い。境界を越えた学びをどう実効性ある形で実現するか、興味深く見守りたい。また、理系4学部の大学院進学率の更なる向上にも期待したい。



2) 国際化:指摘事項

・コロナ禍という逆風の割には、SGU構想は着実に進展しているものと認められる。当初コロナ禍対策として意識されたオンライン活用は、コロナ後でも有用であるとの認識が醸成されたとのことであり、今後オフライン・オンライン双方の利点を最大限に活用したハイブリッド教育の開発・進展が求められる。

・コロナ禍でオンラインプログラム参加者が前年の3倍以上に増加させていることを高く評価する。今後の国際化において大切なことは「内なる国際化」だと考える。キャンパス内が真に国際化すること、日本人学生と海外からの留学生が分け隔てなく共に学び、交流することが実現できている大学は少ない。このような環境をどう整えるのか、今後の取り組みに期待したい。



3) AI人材育成(オンデマンド型授業):指摘事項

- ・AI開発は理系が多いかもしれないが、実社会でAIを活用すべき者は、営業部門を始めとする文系出身者も多い。AIプログラムを受講する文系学部生の増大を期待する。
- ・学ぶ学生は学ぶ、そうでない学生は学ばない。大学間でも格差があるが、大学の中の学生間でも格差ができるので、よりきめ細やかに学生の学修状況を把握し、どう対応するかという、もう一つの視点がこのオンデマンド授業については必要であると思う。
- ・単位制度と時間制という今の大学の仕組みが問題。例えば、医学部は時間制で教育を行っている。他の学部は単位制度、授業が何単位、演習が何単位というくりで今までやってきた。それは、時間外学習を念頭に置いていないルール。今後は、各大学の現状にフィットするよう文科省の制度設計を変えていかなければならない。



5) 学部教育改革:指摘事項

- ・経営と教学とが連携したマネジメントの志向は今後に期待できる。
- ・米国で始まったSTEM教育(科学・技術・工学・数学)は、具体的な問題解決に繋がる、未来社会を見据えた教育として注目され、最近ではリベラルアーツのAを加えたSTEAM教育として期待が高まってきている。理系学部と総合政策学部の連携、経済学部における数学の履修推進など、KGでもSTEAM教育の実践が見られる。全ての学生を対象としたSTEAM教育が求められる時代になりつつある中、学生に履修を促すためには、文系学生の履修が可能なような内容の検討が必要で、リベラルアーツ教育の重要な側面として設定するための具体的な検討を期待したい。
- ・法、経、商学部を中心に展開されている学部教育改革は興味深い取組。これらの学部での学びから学問の面白さを理解し、大学院進学を目指す学生が少しでも増えることが大切である。学部教育改革がこのような形での成果につながることも期待したい。



7) IR推進:指摘事項

- ・データに基づく経営は、合理的で構成員の共通意識に基づいた経営につながるものとして評価できる。また、多様なステイクホルダーとのコミュニケーションにも役立つ。データの発掘・収集においては、枝葉末節にとらわれず、骨太なエビデンスとなるよう留意されたい。
- ・IRの分析結果を直接的な受益者である学生にどうやってフィードバックするかということが最も大事。フィードバックすることが今後の学生の成長に繋がる。
- ・データで可視化することは極めて重要なことだが、可視化された情報を基に、現場を確認し、学生と接し、数値に表れない事実を認識することこそ大切。その姿勢や感性が失われることがないよう、数値化の意味を十分に学内浸透させていただきたい。



外部評価を踏まえたNext Action

- ☑学生の学びや成長への支援に教職員が一層力を注げるよう DXや業務効率化を推進する。
- ☑ポストSGUを見据え、今後の国際化の方向性を明確化する。
- ☑SGUの取組成果を踏まえ、「ダブルチャレンジ」を一層推進するとともに、分野横断、文理融合を促進させる仕掛けを検討する。
- ☑オンライン/対面の双方の利点を生かしたハイブリッド型の教育プログラムの開発を推進する。
- ☑多様なステークホルダー（学生も含め）とのコミュニケーションを活性化させるため、IRの取組を一層推進する。
また、学生の成長へとつなげるため、コンピテンシーの客観評価の方策について具体化させる。